

現代の国語・言語文化

第1問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

ヒトの言語は、基本は音声言語である。発話する際には、息を吐き出しながら、声帯を振動させてその息を口蓋にぶつけ、舌や歯や唇の状態を変えていろいろな音に区切る（「調音」と呼ばれる）。この区切った音をつなげて、単語が生み出される。チンパンジーはこうした発声ができない。というのは、彼らの発声器官はそれを可能にする構造になっていないからである。

ヒトのこうした調音は、ヒトの首が長くなり、喉頭が下がって咽頭が長くなったことによっている。これは直立姿勢の副産物であり、したがってヒトの言語能力も間接的には直立姿勢の賜物だと言える。もちろん、直立姿勢になってすぐに言語能力が出現したわけではないだろうが、少なくともこれによって、音声言語を可能にする発声と調音の前提条件が整った。

では、^アヒトはいつからことばを話していたのだろうか？ 声は残るものではないし、言葉を話し理解する役目の脳も腐って残りはしないから、これには答えられないように思える。ところが、（注1）脳の容れ物である頭蓋は、偶然が重なった結果まれに残ることがあり、この内側面の形から脳の形を推測できる。現代人の脳の（注1）ブローカ野にはふくらみがあるが、フロリダ州立大学の自然人類学者、デイーン・フォークによると、一九〇万年前の化石人類の頭蓋の内側にもそうしたふくらみの痕跡が認められるという。もちろん、その部分が言語に用いられていたかどうかはこれだけからはわからない。

二十五万年前の初期のホモ・サピエンスの脳は、現代人とほぼ同じ大きさである。単純に脳の大きさが言語能力を生じさせる前提だったと考えるなら、彼らも言語能力を有していた可能性がある。

別の証拠は、ごく最近、遺伝子解析による研究からも得られている。二〇〇一年、ブローカ野で発現する、言語能力に関係する遺伝子が発見された。FOX P2と呼ばれる遺伝子である。このFOX P2は、ヒトでは単一のタイプだけが存在し（つまりヒトであればだれでも持っている）、この遺伝子に異常がある人の場合には、発話に障害が見られたり、文法の習得が困難だったりする。チンパンジーはこのタイプの遺伝子をもっていない。

二〇〇七年、ドイツのマックス・プランク進化人類学研究所のスヴァンテ・ペーボのチームは、ネアンデルタール人の化石人骨の骨髄に残っていた細胞のなかからDNAを抽出し、その塩基配列の一部を解読することに成功した。その解読した部分には、FOX P2遺伝子も含まれており、そのDNA配列は私たちホモ・サピエンスと同一だった。ホモ・サピエンスの祖先とネアンデルタール人の祖先が分岐するのはおよそ五十万年前のことだ（すなわち、この時期には両者の祖先は共通だった）から、その時代の人類も（もちろん初期のホモ・サピエンスもネアンデルタール人もだが）、ことばを話すだけの能力はもっていた可能性がある。

しかし、二十五万年前頃に複雑な石器が現れ、とりわけ五万年前以降に洗練された石器が現れるということが、手による「操作」能力の向上の反映と考えるなら、言語能力もその頃に本格的に開花したと考えるのが無難かもしれない。言語も、「操作」——言語音を並べて単語にする、単語を並べて文を作る、単語の形を規則に従って変化させる——がその根幹をなしているからである。

言うまでもないことだが、ヒトは、生まれてきてすぐしゃべれるわけではない。声を自分でコントロールしてしゃべることができるようになるには、成熟と発達の長い期間が必要である。生後二カ月から三カ月目ぐらいから、アーとかクーとかいった一音節の声を発し始め（「クレーイング」）、生後半年ぐらいで意味をもたないババ、バブ、ブーブといった二音節の喃語（英語では「バブリング」という）が出現する。一歳を過ぎるあたりから意味を持った単語（初語）が出てく

る。一つの単語で言いたいことを表現する一語文の時期である。そのうち、使える単語の数も少しずつ増えてゆき、文も二語文や三語文になる。そして二歳半から三歳を過ぎる頃に、ことばの「爆発」が起こる。語彙が爆発的に増え、一気にできるようになってゆく。これから言えるのは、まわりで話されていることばの音声を区別し、発音し、理解し、記憶するというシステムの構築が実は水面下で着々と進行しているということだ。それがほぼできあがって、二歳半から三歳頃に一挙に表面化するのだ。

まわりで話されている言語は、幼ければ自然に習得される。個々の発音の聞き分け方や発音のしかた、単語の構造、そして文を構成するためのルールが、日常的な生活や遊びのなかで自然に身についてゆく。日本語の環境のなかで育てば、放っておいても、日本語ができるようになるし、英語の環境のなかで育てば、自然に英語が身につく。

しかし、言語のこうした自然の習得には、時間的な限界、「臨界期」がある。その言語のネイティブ・スピーカーになるには、十歳とか十二歳（完璧な聞き取りや発音ということなら五歳とか六歳）ぐらいまでが限界である。大ざっぱに思春期を迎える頃までと思ってもらってもよい。これぐらいまでの間に、その言語の環境のなかに浸りきらなくてはいい。

ということとは、この臨界期を過ぎてから言語を一から習得しようとしたら、自然な形での習得は困難になる。もし、生まれてから臨界期までの間に、言語に触れる機会がまったくなかったとしたら、その後言語を習得しようとしても、ほぼ不可能な結果に終わると推測される。

事例の一つは、一九七〇年にロサンゼルスで保護されたジニーという十三歳の少女のケースである。彼女は十三年間社会から隔離された状態ですごし、ことばのない環境で育った（両親は彼女のまえではことばを話さなかった）。保護された時、彼女はことばをまったく解さなかったし、その後四年にわたって専門家による教育が行われたが、言語の能力はほとんど進歩しなかった。

実は、私たちの多くも、この臨界期を身をもって体験している。臨界期を過ぎてからの外国語の習得である。

A

私の場合、英語を中学になって習い始めたが、当然ながら自然には習得できなかった。膨大な時間を費やして発音を習い、単語を覚え、熟語や慣用句を覚え、文法を覚えて、その挙句なんとか読み書きに困らないレベルになった程度だ（話したり聞いたりするのは困ったレベルのままだ）。とはいえ、外国語をまったく習得できないわけではない。習得済みの日本語を土台にして習得してゆくことは可能だ。

逆に、臨界期のなかであれば、複数の言語の環境にさらされることで、自然に複数の言語を習得することも原理的には可能である。B バイリンガルやマルチリンガルである。「原理的には」と書いたのは、どちらの言語もネイティブ・スピーカーと言えるまで完璧にできるようになるためには、それぞれの言語の環境に十分に浸りきらねばならないからである。C、それを保証するだけの生活環境と時間が必要になる。通常は、どちらの言語も完璧にできるようになるのは難しいことが多いが、不可能ではない。

では、なぜ臨界期があるのだろうか？ 外国語の習得に四苦八苦している人なら、そういう疑問をもつかもしれない。祖先の時代のことを考えてみよう。人は生まれた場所で育ち、そこか、そこからそう遠くない地域で、すなわち同じような言語を話す人々の間で一生を送ることがほとんどだった（冒険心をもって遠くまで行く人もいたかもしれないが、集団での移動なら、集団内のことばによるコミュニケーションには困らなかつたろう）。だから、一つの言語を習得するだけでこと足りた。その習得は、おとなとして社会のなかで生きてゆく以前に完了している必要があった。母語を異にする人どうしがコミュニケーションをとり合うという状況が生じたのは、進化の長い時間のなかではごく最近のことであり、D グローバル化が進む現代にそれが顕著になった。これによって、臨界期以降での新たな言語の習得が必要になるという状況が生じたのだ。

では、ここで手話について考えてみよう。日本には日本手話があり、スペインにはスペイン手話が、中国には中国手話がある。イギリスとアメリカでは手話が別々に誕生したため、音声言語と同じ英語なのに、まったく異なる手話を用いている。個々の手話は、その手話固有の表出規則や文法規則があり、一つの独立した言語システムをなしている。もしあな

たが手話はたんなるジェスチャーであって言語ではないとか、手話は世界中どこでも共通だとか思っているなら、それは大きな誤解である。

手話の習得にも臨界期がある。手話でコミュニケーションをとる環境がまわりにあれば、低年齢での手話の習得は、自然にかつ迅速に行われる。生後すぐから手話の環境にいる耳の聞こえない子どもでは、手話の喃語を発する時期もある。音声言語と手話両方の環境で育った健聴の子どもでは、音声言語の初語よりも手話の初語のほうが二カ月ほど早く出現することも報告されている。これらのことから、オークランド大学（ニュージーランド）の心理学者マイケル・コーバリスなどは、ヒトの進化の過程で、手話が音声言語に先行していたのではないかと考えている。音声言語と同様、手話の習得も、臨界期を過ぎてからは一気に難しくなる。

ネイティブの言語として手話を習得した場合には、その言語中枢は左脳にできる。手話を習得したのちに失語になってしまった患者を調べた最近の研究は、手話の生成に困難を示す患者ではブローカ野に損傷があり、手話の理解に困難を示す患者では（注）ウエルニッケ野に損傷があることを見出している。つまり、手話も、音声言語と同じ脳の領野を使うのである。

なぜ、音声言語も手話も、使うのは左脳なのだろうか？ 全般的に、左脳は、右脳と比べて逐次的な処理——すなわち、順序に沿ったものごとの処理——を得意とする。音声言語も手話も、時系列に沿って（そして文法に則って）発話を組み立てる（あるいは解読する）という点ではこの処理様式に則っている。

こう書いてくると、大脳の各領野の機能は最初から明確に決まっているという印象をもたれた方もいるかもしれないが、必ずしもそうではない。実際には、各領野の機能は脳の発達のプロセスのなかで固定化されてゆく。つまり、機能の固定化は、経験を通して起こり、それには時間がかかる。このプロセスのなかで、場合によっては、ある機能が通常とは異なる脳領野に固定化することがある。

たとえば、生後の発達の初期の段階で大脳の一部が使えなくなってしまう場合には、機能と領野の対応関係の再編成

が起こることがある。極端な例をあげると、幼い時に片方の大脳半球のほとんどを外科手術で取り去った部分が担当するはずの機能が、残っている部分に入り込むことがある。

このように、脳は驚くほど可塑性に富む。ただし、これは大脳が発達途上にある時にほぼ限られる。それぞれの機能が大脳の各部分に固定化されてしまうと、それを編成し直すことはほぼ不可能になる。これらのことを踏まえると、母語の習得は、幼年・少年期を通して、言語の理解や表出の機能が特定の脳部位（ほとんどの人では左脳）に専門化・固定化されてゆくプロセスとして考えることができるだろう。

（鈴木光太郎著『ヒトの心はどう進化したのか―狩猟採集生活が生んだもの』に基づく）

（注） 1 ブローカ野……言語を話すことに関わる脳の領野。

2 ウエルニッケ野……言語を理解することに関わる脳の領野。

問一 傍線部ア「ヒトはいつからことを話していたのだろうか？」とあるが、ヒトの言語能力獲得の起源を推測する手がかりとして適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

- ① 頭蓋の内側のふくらみの痕跡
- ② 頭蓋から推測される脳の大きさ
- ③ 言語能力に関係する遺伝子
- ④ 音声言語の自然な習得過程

問二 傍線部イ「言語のこうした自然の習得には、時間的な限界、『臨界期』がある」とあるが、言語能力の習得と臨界期の関係についての説明として適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、イ。

- ① 臨界期である思春期を迎えるまでに、ある言語環境に浸ることとその言語を自然に習得できるようになる。
- ② 臨界期を過ぎてから母語以外の言語を習得することは、困難を伴うが不可能ではない。
- ③ 臨界期までに母語を含む言語に触れる機会がまったくなくても、学習を経ることによって言語を習得できる。
- ④ 臨界期において複数の言語の環境にさらされた場合、複数言語話者になることは原理的には可能である。

問三 空欄 A ～ D に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、ウ。

- | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|--------|
| ① | A | あいにく | B | それは | C | たとえば | D | そのため |
| ② | A | そもそも | B | つまり | C | ところが | D | とくに |
| ③ | A | もともと | B | たとえば | C | そのため | D | ややもすると |
| ④ | A | たとえば | B | いわゆる | C | つまり | D | とりわけ |

問四

傍線部ウ「なぜ臨界期があるのだろうか？」とあるが、臨界期がある理由について筆者はどのように考えているか。適切なものを、次の①～⑦の中から二つ選べ。ただし、順序は問わない。解答欄は、

エ

・

オ

。

- ① 人は生まれた場所で育ち、その近くの地域で暮らす同じような言語を話す人々と一生を送ることになるから。
- ② 言語の習得は、おとなとして社会の中で生きてゆく以前に完了している必要があるから。
- ③ 進化の長い時間のなかで、母語を異にする人どうしがコミュニケーションをとる必要があったから。
- ④ 言語は時系列に沿って発話を組み立てるとい点で、左脳の逐次的な処理様式に則っているから。
- ⑤ 脳の各領野の機能は脳の発達のプロセスのなかで固定化されるが、それには時間がかかるから。
- ⑥ 生後の発達の初期段階で脳の一部が使えなくなると、機能と領野の対応関係を再編成する必要があるから。
- ⑦ 脳の発達の過程で、言語の理解や表出の機能が特定の脳部位に専門化・固定化される時期があるから。

問五

本文の構成についての説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

カ

。

- ① ヒトの言語能力の進化と言語獲得における臨界期の二つについて、疑問を投げかけて焦点を絞り内容を掘り下げるといふ展開で詳しく説明している。
- ② ヒトの音声言語の特徴を説明するために、ヒトとチンパンジーの発声器官の違い、母語習得と第二言語習得の違い、言語と手話の文法の違いを、対比的に取り上げて論を展開している。
- ③ ヒトの言語能力獲得の起源や自然言語の習得過程について、先に疑問を投げかけて仮説を示し、後から個々の疑問に対して具体的な事実を提示しながら答えを導き出すという展開で論を進めている。
- ④ 音声言語や手話の習得の特徴を説明するために、著名な研究者によって明らかになった事実や成果に疑問を投げかけ、新たな視点を示すことで説得力のある論を展開している。

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、キ。

- ① チンパンジーは、調音を可能にする発声器官をもっているが、直立姿勢をとることができなかつたため、ヒトのよ
うな言語能力は発達しなかつた。
- ② ヒトは生まれてすぐに話すことができるわけではなく、意味のない初語、一語文である喃語の時期を経て、語彙が
爆発的に増え、ことばの音声を区別し、発音し、理解し、記憶するシステムの構築へと段階的に進んでゆく。
- ③ 手話は世界中のどこでも共通なのではなく国や地域で異なっており、それぞれ独立した言語システムをなし、ネイ
ティブの言語として手話を習得した場合は、音声言語と同様に言語中枢は左脳にできる。
- ④ 脳の各領野の機能は、最初から明確に決まっているが、発達のプロセスにおいて、ある機能が通常とは異なる脳
領野に固定化する場合もある。

第2問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

ア 人間関係というのは、多くの場合、他者との協力関係と言いつ換えることができる。お互いに得るものがあって、交換したり、分かち合ったりしている。仕事であっても、また趣味や近所づき合い、友人、恋人、あるいは家族であっても、抽象するとだいたい同じである。逆にいえば、協力関係ではないものは、既に人間関係ではない。いがみ合っているだけのような場合は、その関係から離れば済むことである。離れられない理由がどちらかにあるから、関係というものができさる。

人間関係においても、「楽しさ」には、ある程度の苦勞が必要となる。我慢をして初めて得られる、という関係だ。得られるものがわかっているから我慢ができることもあれば、また、我慢をしていたら、思いのほか素晴らしいものが得られることもある。さらには、そういった損得を考えず、我慢をするだけで（尽くすだけで）満足できるといふ心境に至るような場合だって少なくない。

さて、「我慢をする」と簡単に言っても、そこにはやはり最低限の「理解」が必要になる。「ああ、この人はきつとこんなふうを考えて、こんな態度を取っているのだな、まあ、このくらいのことではしかたがないか」というように、自分で納得するから、人を許すことができるようになる。「どうしてこんな馬鹿なことをするんだ？」と怒ってしまう人は多いが、少なくとも「どうしてか」が理解できないから腹が立つのだ。それが理解できれば、「そんな理由があれば無理もないか」と考えられるし、「それならばこうしてはどうか」という手が打てることも、あるいは、「少し待てば、好転するかもしれない」としばらく時間を置くような対処もできる。冷静さに必要なのは、この「理解」なのである。

人を理解するというのは、その人との対話によっても可能だが、会話がなくてもわからないときもあるし、また、会話がなくても、想像によって理解することもできる。

多くの人は、自分がどんな感情を抱いているか、ということを明確に捉え（自覚し）ていないので、対話をして、その

本人の口から言葉を引き出しても、その人の気持ちの本当のところはなかなかわからない。本人もわからないのだから、適切に表現ができる道理がない。

それよりも、その人の行動、過去の履歴などに基づいて、仮説を立て、「きっとこう考えているのだろう」と想像することで、理解ができる場合が多い。「そんなの勝手な理解だ」と言われるかもしれないが、そのとおり勝手な思い込みである。もしかしたら、まったくの誤解かもしれない。でも、「まあ、良い方に考えて、ここは引き下がるう」といった^(注1)ジェントルな選択だってできる。たとえ誤解だったとしても、それで自分が納得できれば良い、と僕は考えることにしている。

A、人がどう考えて行動しているのかを捉えることも、やはり抽象的な思考の一環といえるし、自分の行動との関係を考察すれば、多少具体的であっても、少なくとも客観的な思考といえるものになる。そのうえで、やはり具体的な個々の言動にあまり囚^{とら}われることなく、全体的な傾向として、大まかにイメージすれば、その人はどんなふう to 考えやすいか、どんな行動を取りやすいのか、という一種の「人間の型」が把握できるだろう。

この「全体的」というのは、その人だけを考えるのではなく、同じような人と比較をする、まったく反対の人との違いに注目する、あるいは、同一の人であっても、過去の別の言動を踏まえて考える、というような広がりをもって、ぼんやりと関連させてイメージする、という意味である。

また、ここでいう「人間の型」というのは、いわゆるタイプのようなものだが、心理学などに出てくる有名で典型的な人間のタイプではない。自分で勝手に、「○○型」と名づけても良い。その人が村田さんなら、「村田型」になる。ほかに村田型がないか探してみても良いし、村田さんのどんな言動が代表的な村田型なのかを捉えられると、しだいにはつきりするが、あまり[↑]厳密に絞らない方が良い。

これはつまり、「村田さんのような人」というのと同じ意味で、「〴〵のような」をつけるだけで抽象化できてしまうのである。

B、注意する必要があるのは、「型」はあくまでも「型」であり、また抽象化されたものは、具体的な(注2) ディテールが捨てられたものだ、という認識を忘れないことである。だから、こういつた考えを持つことは、自分自身の理解のためだとまず割り切る方が良い。他者にあれこれ話すことは誤解を招くだろう。「あいつは、こういうタイプの人間だから、きつとこう考えているはずだ」などと吹聴(ふいちよう)しない方が良い。逆に相手からは、「この人は、人間を全部自分のモデルに当てはめて考えようとする」という「型」で見られてしまうだろう。

C、人間というのは、そんなに単純なものではない。また、その人の言動は、時と場合によって変わるし、考え方もタイプもずっと同じではない。揺れ動いているのが普通である。さらに言えば、深い考えをする人間ほど、なかなか本心というものはわからない。どう見せようか、ということを考えて行動しているため、言動から類推できることは、あくまでも作りもの、演じられている外交的な型でしかない。そういう人は、場合によってまったく違うタイプになることがあって、あたかも多重人格者のようにも観察されるが、それは、こちらの見方が、部分的だから起こることである。

重要なのは、決めつけないこと。これは、「型」を決めてしまつて、そのあとは考えない、では駄目だという意味だ。抽象的に、ほんやりと捉えることで、決めつけない、限定しない、という基本的な姿勢を忘れないように。

D、このような「他者がどう考えているのか」ということをまったく考えない人もいる。全然考えないというのは、おそらく人間として能力不足だろうが、たいていの場合、「自分のことをこう見てほしい」というくらいの願望がせいぜいで、それ以上に考えない。考えたくない、ということかもしれない。

客観的、抽象的な考えができない人というのは、つまり「そうは考えたくない」という人なのである。あるいは、感情的に「そんなふうに見えるのは嫌いだ」という気持ちを持っている場合もある。人のことをあれこれ考えるのはいけないこと、はしたないことだ、と思っている人もいるかもしれない。

だから、ここでははっきりと宣言しておく。なにを考えても、いけないということは無い。考えることは自由だ。ただ、考えたことをすべて、そのままアウトプットしてしまうと、なにかと問題が起こる。その点は注意をすべきである。他人

を分析することは大切だが、その分析結果を全面的に口に出さない方が良く、その分析に基づいて行動するときには、あくまでも仮説だということを忘れてはならない。

もし人に話したかったら、匿名にして、それこそ抽象的に語るべきだ。また個人に対して述べるときには、その人を貶めるようなことがないように細心の注意を払って表現する必要があるだろう。自分では「あくまでも架空の型だ」と認識していても、話を聞いた人は、貴方がその「型」で人を決めつけて見ていると判断しかねない。

そもそも、「型」は抽象的であり、具体的なディテールを剥ぎ取った「本質的な傾向」を示すものだ。必ずいつも絶対的にそうなる、というものではない。そこまで単純化できるはずがないことは、誰だって想像できるだろう。怒りっぽい人だって、笑顔になることはある。どんなものにも例外はあるし、また、あるとき突然その型から脱皮するような変化が訪れるかもしれない。

抽象的に考えるというのは、ぼんやりとしたイメージや傾向といった「型」を抽出し、それを応用することであるが、その「型」を言語化したときに具体的に足りすぎて、杓子定規に「常にそうなるものだ」と決めつけてしまうと、持ち味だった「ぼんやりとした抽象性」が失われてしまう。この落とし穴に、いつも気をつけること。

抽象的思考の初歩の段階では、ついつい、そういつた「思い込み」に陥りやすいのである。

「他人がどう考えるかを想像する」ことを、日本語では「人の身になって考える」という。自分の都合の良い主張をするのは簡単だが、それを聞いた相手がどう感じるのかを予測しておくことは、一つには「思いやり」であり、また逆に考えれば、相手の反応を見越して、より有効な表現を選択するという戦術が取れるわけで、自分にとっても非常に有利となる。

相手の身になって考えるという場合、それは、もし自分が相手の立場だったら、どう感じて、どう考え、どう対応するだろうか、ということが基準になっている場合も多いだろう。相手がどんな人間なのかわからないときには、ひとまず、自分に置き換えて考えるしかない。すなわち、相手の傾向を推定するとき、常に自分が基準になっているのである。

だから、人を観察する以前に、自分に対する観察がまずなされている必要がある。人の思考を分析し、その反応を予測するためには、自分の思考の過程や反応の傾向を参考にすることができる。

どう感じるのか、という感覚的なものは、誰もが「自分」でしか体験できない。ようするに、人間は「自分」しか経験したことがないのである。言葉や行動などで外部に表れ観察できる感情はほんの一部であって、感じたことの大部分は自身にしか知れない。また、感じることと同様に、考えることも、自分でしか体験できない。人が考えているとき、その頭の内部を覗き見ることはできない。したがって、他者がどう考えるのかを想像するには、自分がどう考えるのかをよく観察していることが不可欠となる。

これは、「視点」といったものでも同じで、客観的な視点を持つには、まず主観的な自分の視点がどういうものかを把握する必要がある。抽象的なものを捉えるためには、排除すべき **X** を知っていなければならない。いずれも、囚われないためには、囚われているものを、あるいは囚われている状況を、しっかりと見極める必要があるからだ。

他者を抽象化するときには、その人物が持っている傾向をどう解釈できるのか、が問題になる。その場合、「自分ならばこう考えるけれど、どうやらあの人はそうではなさそうだ」という具合に、まずは自分との違いとして目立った特徴が観察できる。そして、何故違った考えをその人は持つのか、それは前提となるものが異なっているからだろうけれど、では、何故前提が違っているのか、どこで違ってくるのか、とつぎつぎに考えが及ぶことになるだろう。

(森博嗣著『人間はいろいろな問題についてどう考えていけば良いのか』に基づく)

(注) 1 ジェントル……温和であるさま。穏やかであるさま。

2 デイテール……詳細な部分。

問一 傍線部ア「人間関係」というのは、多くの場合、他者との協力関係と言い換えることができる」とあるが、筆者の考える「人間関係」についての説明として適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、**ア**。

- ① 人間関係とは互いに協力し合う関係であり、仕事仲間や友人、恋人であつても同様の関係が成り立っている。
- ② 人間関係とは相手に尽くすことが前提になる関係であるため、その関係を保つには常に苦勞や我慢が必要となる。
- ③ 人間関係では他者理解が重要であるが、人を理解するということは難しく、相手の口から言葉を引き出してもその人の本当の気持ちはわかりにくいものである。
- ④ 人間関係では相手の気持ちを正確に理解することが難しいため、たとえ誤解であつても相手の気持ちを想像し、その分析結果に対して自ら納得することが大切である。

問二 空欄 **A** ～ **D** に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、**イ**。

- ① A このように B 当然ながら C まず D ところが
- ② A もし B しかも C たとえば D さらに
- ③ A 一方 B あるいは C ところで D そして
- ④ A また B なぜなら C とくに D だから

問三 傍線部イ「厳密に絞らない方が良い」とあるが、筆者は型をどのように考えるべきだと主張しているのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 型を、具体的な性格として理解する。
- ② 型を、細部にこだわって理解する。
- ③ 型は、外見に囚われず本心を捉える。
- ④ 型は、抽象的に大まかに捉える。

問四 傍線部ウ「抽象的思考」とはどのような思考か。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、。

- ① 他者の本当の気持ちを理解するため、まずは自分がどう考えるのかをよく観察し、明確に捉えようとする思考。
- ② 他者の発言や行動といった具体的な要素に基づいて、その人に当てはまる明確な「人間の型」を捉えようとする思考。

③ 他者を観察するときに、イメージや傾向といった大まかな「型」を抽出し、それを応用する思考。

④ 他者の思考や言動は単純に理解することはできないため、常にその人の考えや行動が表れているところを部分的に捉えようとする思考。

問五 空欄 に入る最も適切な言葉を、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 客観性
- ② 主体性
- ③ 創造性
- ④ 具体性

問六 本文は人間関係における他者理解について述べたものであるが、筆者の考えと合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、カ。

- ① 他者を理解するためには、その人がどのような「人間の型」に当てはまるかを考え、その具体的な分析結果を他人と共有すると良い。
- ② 他者の身になって考えるということは、相手に対する「思いやり」であり、自分にとっても相手の反応を推測することにより戦略的な対応ができるという利点がある。
- ③ 他者がどのように考えるのかを想像するには、自分自身を観察したうえで、その思考過程や反応傾向を参考にしながら、他者との共通点を探すところから始めるのが良い。
- ④ 他者を理解するためには、相手の全体的な傾向を厳密に捉える必要があるため、相手の感情や行動から排除すべき抽象的なものを知らなければならぬ。

第3問 次の各問（問一～問九）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各群において、傍線部の漢字が適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ア ・ B イ ・ C ウ ・ D エ 。

A
① あまりの騒音に我慢も限界に達した。
② 旧家が所蔵する古文書を見せてもらった。
③ この機械の点検は彼に任せてある。
④ 堆積した落ち葉が木の養分になる。

B
① 会議の進行を妨害しないでほしい。
② 彼の奇抜な行動にみんな驚いた。
③ 山間部の村では過疎化が進行している。
④ 満員電車の中で、叫びたい衝動に駆られた。

C
① 彼はどんな客でも巧みに応対する。
② 架空の世界を舞台にした小説を執筆した。
③ 事態を打解するために対策を講じた。
④ 彼は工事の概略を説明して回った。

D
① 上司から自宅での待期を命じられた。
② 厳しい審査を経て優秀作が選ばれた。
③ 反対派を懐柔して議案を通した。
④ 誠心誠意謝ったが許してもらえなかった。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A オ ・ B カ ・ C キ ・ D ク 。

A
① 抽出（テキシユツ）
② 匿名（トクメイ）
③ 拝謁（ハイエツ）
④ 包含（ホウガン）

B
① 温床（オンシヨウ）
② 流布（ルフ）
③ 釣果（チヨウカ）
④ 莊嚴（ソウゲン）

問四 次のA～Cの四字熟語の□に入る漢字の組み合わせとして最も適切なものを、それぞれ後の①～⑦の中から一つ選べ。解答欄は、A シ・B ス・C セ。

- | | | | | | | | |
|---|----------------------------|----------------------------|-----|----------------------------|----------------------------|---|---|
| A | 信 <input type="checkbox"/> | 必 <input type="checkbox"/> | B | 空 <input type="checkbox"/> | 絶 <input type="checkbox"/> | C | <input type="checkbox"/> 象 <input type="checkbox"/> 象 |
| ① | 有―無 | ② | 前―後 | ③ | 長―短 | ④ | 同―異 |
| ⑥ | 善―悪 | ⑦ | 賞―罰 | ⑤ | 朝―暮 | | |

問五 次のA～Cの各群の動詞はすべて、体の一部を表す共通の名詞と共に用いられて慣用句になる。それぞれにあてはまる名詞を、後の①～⑨の中から一つ選べ。解答欄は、A ソ・B タ・C チ。

- | | | | | |
|---|------|-----|-----|-----|
| A | 下がる | 冷やす | 抱える | ひねる |
| B | あしらう | かける | つく | 折る |
| C | 光らせる | とめる | 盗む | 肥える |
- ① 首 ② 足 ③ 腰 ④ 頭 ⑤ 目 ⑥ 耳 ⑦ 鼻 ⑧ 肩 ⑨ 口

問六 次のA、Cの各群において、意味の似ている言葉の組み合わせとして適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ・B ・C 。

C				A				B			
④	③	②	①	④	③	②	①	④	③	②	①
お払い箱になる	ふてぶてしい	鎮圧する	所在ない	調節	明朗	交渉	著名	恐縮する	抵抗する	心得る	寝返る
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
暇を出される	そっけない	平定する	手持ち無沙汰だ	加減	快活	折衝	署名	かしこまる	あらがう	たしなめる	裏切る

問七 次のA群とB群において、傍線部の言葉の用法が適切でないものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ナ ・ B 二 。

- A
- ① もし彼の無実を証明できるのならば、証拠を提出しなさい。
 - ② もしかすると彼の無実を証明できるに違いないから、証人になってください。
 - ③ もしも彼の無実を証明できるとすれば、それは彼女の証言でしかないだろう。
 - ④ もしや彼は無実だったのではないか、と考えたことはありませんか。

- B
- ① 彼は私の顔色を見ながら、おそろおそろ話し始めた。
 - ② 彼はいかにも自信に満ちた態度で、こわごわと話した。
 - ③ 彼は上目遣いにこちらを見ながら、おずおずとしゃべり出した。
 - ④ 彼ははにかんで、もしもじとうつむいていた。

問八 傍線部の助詞が例文と同じ使われ方をしているものを、①～④の中から一つ選べ。解答欄は、 又 。

(例文) 明日は友達と動物園に行く予定だ。

- ① 学校に着くとすぐに雨が降ってきた。
- ② 宮島は祖父母と一緒に訪れた思い出の場所だ。
- ③ 塩と砂糖を買ってきてほしい。
- ④ 壁に「時は金なり」と書かれた紙が貼ってある。

問九 次の□に適切な言葉を入れて文を完成させたい。後の①～⑥の中から□に入らないものを一つ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、ネ。

「つらい。」□弱音□吐いたり責任転嫁をしたりする前□、自分の頭□考えなければならないこと□あるはずだ。

- ①が ②に ③へ ④と ⑤で ⑥を

〔現代の国語・言語文化の問題は以上です〕